

プログラム

一、寄席入門
よせにゆうもん

春風亭柏枝

二、講談

田辺いちか

三、落語

春風亭柏枝

お仲入り(休憩)

四、色物

柳貴家雪之介
《大神楽曲芸》

五、落語

林家たい平



はやしや たいへい
林家たい平



やなぎや ゆきのすけ
柳貴家雪之介



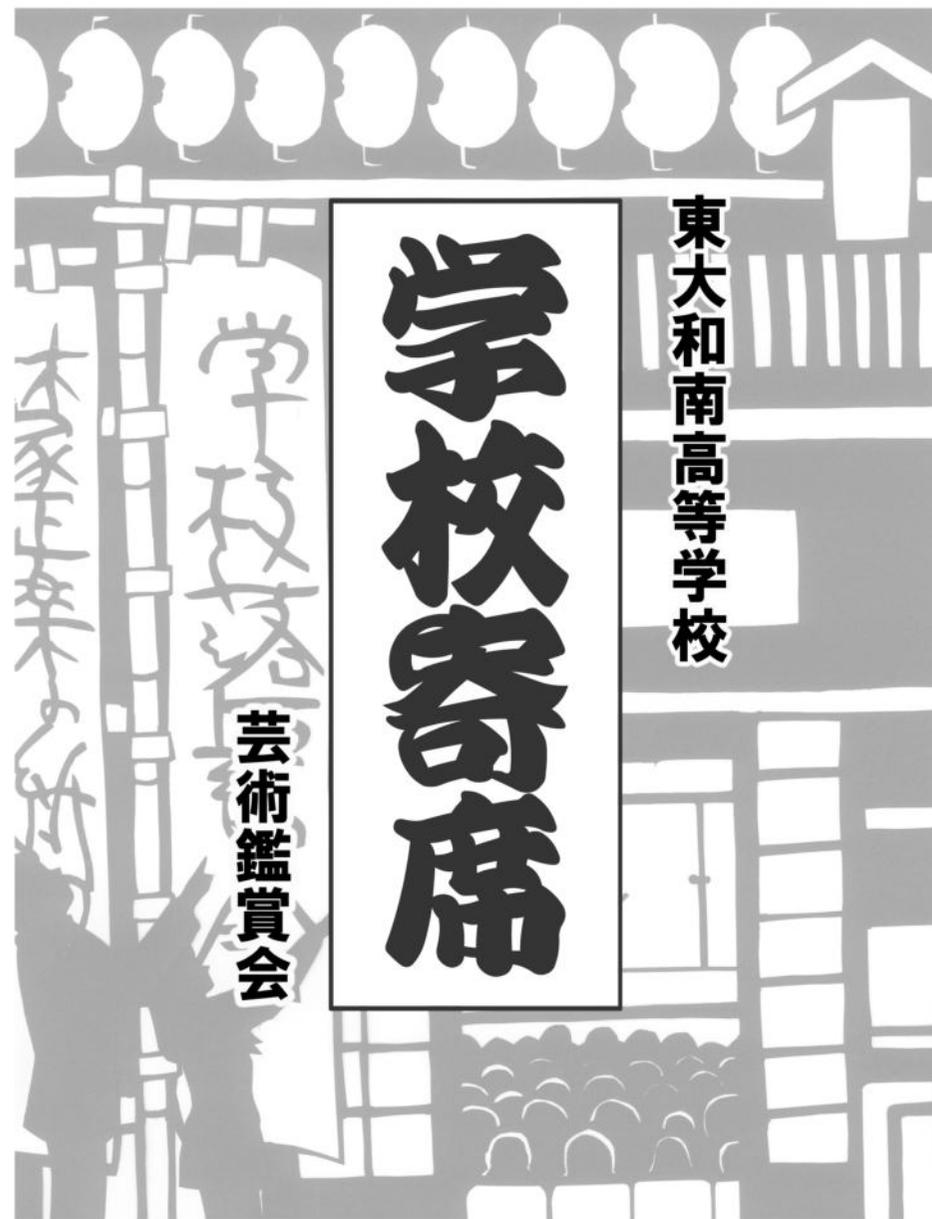
しゅんぶうていはくし
春風亭柏枝



たなべ いちか
田辺いちか

～生徒の皆さんへ、お願いとお知らせ～

- 公演中の他の生徒さんとの私語はつつしんでください。
- 当日の生徒さん個人による写真撮影はお断り申し上げます。
- 携帯電話、アラーム付き時計等をお持ちの生徒さんは、開演前にあらかじめスイッチをお切りください。



紙切り作：三代目 林家正楽

2026年3月19日(木)

たましんRISURUホール(立川市市民会館)

落語入門 落語をご鑑賞いただく前に・・・

落語の歴史

落語の原点と考えられるのは、室町時代・戦国時代に武将に仕えた「伽衆（おとぎしゅう）」という存在です。彼等は娯楽の少なかった当時、世情などを機知に富んだ巧みな話術で、おもしろおかしく人々に聞かせていました。代表的な人物には京都誓願寺の法主、安楽庵策伝和尚や豊臣秀吉に仕えた曾呂利新左衛門などがいます。その後、群雄割拠の戦乱時代には大きな発展がみられず、天下が治まる江戸時代まで時代が経過します。天下太平の江戸時代には様々な芸能を育む機運が熟し、落語もその一つとして勃興します。この頃から落語を職業とする露の五郎兵衛などが登場し、さらには江戸の鹿野武左衛門や大阪の米沢彦八らに継承され、その土台が定着するのです。そして江戸末期から明治時代において三遊亭円朝がそれまでの落語を集大成し、近代落語の基礎を作り上げます。その後、それまでの変遷と同じ様に、その時代の風俗、世情を吸収し、幅広い層に親しまれる大衆芸能として日本人の心に生きづいてきたのです。

落語の形態

■ 噺の種類

笑いに主眼をおいた「滑稽噺」が主流ですが、その他に涙を誘う「人情噺」、芝居がかった「芝居噺」、さらに「怪談噺」など様々です。

■ 寄席

落語を軸とした演芸が演じられる場所。現在でも東京・大阪を中心に点在し、年中無休で興行しています。

■ 色物

落語会において、途中のとところどころで構成される落語以外の演芸の総称で重要な要素。曲芸・奇術・漫才・紙切りなどがあります。

■ 小道具

使われる小道具は扇子と手拭いだけです。これらを色々なものに見立て落語の演出効果として利用します。

■ 鳴り物

お囃子の三味線や笛、前座の太鼓など、寄席のBGM全般の総称。一般的には三味線・太鼓・笛・鉦（かね）などで構成されています。

一番太鼓：開演の約30分前に叩き、「どんどんどント来い」と大太鼓だけでゆっくりと打ちます。また打ち始める前に、太鼓の周りを、バチでカラカラと音を立てて回しますが、この音は寄席の木戸を開ける音を象徴しています。

二番太鼓：大太鼓・シメ太鼓・笛によって、「お多福来い来い」とにぎやかに演奏されます。

追い出し太鼓：終演時に大太鼓だけで「出て行け出て行け（失礼ながら…）」と聞こえるように叩きます。



東京・新宿にある寄席「末廣亭」の舞台

東西での落語の違い

舞台装置：上方落語だけに使われる道具に“見台・小拍子・膝隠し”があります。これらは、演者が前に置く小さな机・拍子木・衝立のようなものです。これは必ずしも、全ての上方の噺家がいつでも用いるということはありませんが、上方特有の舞台装置です。その由来は、上方の噺は動きが盛んなものが多く、どうしても演者の裾が乱れるので、それをお客様に見せないために考案されたといわれています。また小拍子で見台をたたき、その音を場面転換に用いるなど、演出の要素もあります。

噺の名称：噺の内容は、東京・上方に共通するものが多く存在しますが、「時そば」（東京）⇔「時うどん」（上方）のように名称が異なる演目があります。

講談の歴史

講談は書物の内容を説き明かすことから始まったと考えられます。昔は一般大衆が、学問や情報を吸収しようとしても、勉強の場が限られており、耳学問として講談を聞くことがもてはやされました。講談と切り離して考えられないのが、長編軍記「太平記」です。半世紀にわたる波乱に満ちた物語を、演者が話の技法に工夫をして、わかりやすく大衆に広めました。最初に講談を公で演じた人物は、徳川家康に進講した赤松法印と考えられます。江戸時代中期になると馬場文耕が登場します。彼は大変な毒舌家で、痛烈な幕藩体制批判を続けたため、斬首に処せられてしまいました。江戸時代後期になると、森川馬谷が寄席の興行として、講談の形態を確立しました。幕末から明治期、桃林亭東玉は、講談をさらにやさしく説くことを第一義として、際物（きわもの）とよばれるその時々ニュースを題材としたドキュメント風の講談を開拓し、開化講師と呼ばれる二代目松林伯圓は創作の才を生かして、七十余りの新しい講談を世に送り出しました。また現代では、女流講師の進出がめざましく講談界の陣容の3割強を占めており、女性ならではの語り口と発想を生かして活躍をしています。

釈台と張り扇

講談で使われる道具は演じられる内容によって異なりますが、基本的に「釈台（しゃくだい）」と「張り扇（はりおうぎ）」です。講師は釈台（文机のような形）を前にして座り、張り扇（たたまれた扇を和紙で巻いた物）で、釈台を“パン”または“パンパン”と叩きながら話を進めてゆきます。叩くタイミングは、文章でいう句読点をあらわします。

講談と落語の違い

- 1、ストーリー：講談は史実に基づいた内容が中心。落語は創作性が濃く、SF的な構成もある。
- 2、オチ：落語のストーリーの最後には、大半の作品に「オチ（噺の解決、謎解き）」があるが、講談にはない。
- 3、演じ方：落語は噺家が一人、扇子等の限られた小道具を使って話を進める。講談も講師が一人で演じることに変わりはないが、釈台を張り扇で叩いて、その流れるような調子に乗って話を展開するのが基本的。

講談で演じられた作品が落語へ、落語の作品が講談へというようにお互いの枠を越えて、継承されてゆく話は少なくありません。これは講談と落語に限らず、講談から歌舞伎へ、狂言から落語へと素晴らしい作品は次々と形態を変えて、日本の芸能史に刻まれていきます。

